



大賞 [大学生の部]

自らの体験を元にして、日本版インクルーシブ教育の必要性を力強く提言。地域を巻き込んだ形の具体策にも筆者のこだわりが感じられ、審査委員の納得感と高評価を得ました。

インクルーシブ教育の実現に向けて

—— 地域から創る、「福祉教育の日本」

慶應義塾大学 総合政策学部2年

城内 香葉 きうち かえで

1. はじめに

差別を感じながら過ごした小学校時代

私が小学校に入学する年に、特別支援学校の分校（当時は養護学校）が空いた教室を間借りする形で設置された。母の話では、第1回目の行政の説明会では「共生」という言葉が使われ、健常児、障害児が共に学び、共に過ごすことのメリットを語ったそうだ。しかし、それに対する保護者や地域住民の反発が強かったため、2回目の説明会では、あっけなく「普通学校の児童は障害児と接することはなく、今までと変わらない生活が保障される」というものになってしまったという。子どもたちの教育そのものよりも、保護者の説得を優先した形でのスタートを切った。それから、私たちが使用しない時間だけ、グラウンドの片隅を使って運動する彼らの姿を見かけた。暑い夏の日、彼らにプールの使用は認められなかった。図工や習字の授業で特別教室が使えなくなった私たちのために、私たちの保護者は彼らの立ち退き交渉を続けていた。何の不便も感じてはいない私たちのために戦っていたのだ。私は学校という教育の場で、不条理な差別を感じながら過ごした。何もできないことが悔しく、違和感を持ち続け、そして私の中に教育改革への信念が芽生えたのである。それは10年経った今も変わらず膨らみ続け、私が「創りたい未来社会」「創っていかなければならない未来社会」がここに存在する。

2. インクルーシブ教育システムの構築に向けた特別支援教育とは

1994年のサラマンカ宣言以降、欧米をはじめ各国では、ノーライゼーションの理念に基づき、「インクルーシブ教育」が推進されてきた。インクルーシブ教育とは、障害のある者と障害のない者が共に学ぶ仕組みであり、それは単に場を同じにし、

障害者の通常学級への同化を強いるのではなく、個々の多様なニーズに対応し、誰も排除することなく平等に学習できることを目指すものである。

ところが日本では、インクルーシブ教育の推進をしてはいるものの、それを構築するためのプロセスとして「特別支援教育」が導入され、分離教育を続けている。世界の流れに反し、日本が推し進めてきた「特別支援教育」とはどのようなものなのか。2003年3月、文部科学省から出された「今後の特別支援学校の在り方について（最終報告）」の中には、「障害の程度に応じ特別な場で指導を行う『特殊教育』から障害のある児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じて適切な教育的支援を行う『特別支援教育』に転換を図る」¹⁾と述べられており、私の印象に残ったものは、①特殊教育の対象者だけでなく、LD、ADHD、高機能自閉症を含めて障害のある児童生徒を対象にする ②障害のある子どもたちの教育を地域化する ③今まで断片的だった教育からライフステージを見通した支援体制を整える、の3点であった。

3. 特別支援教育（分ける教育）の現状と課題

その後、各地で特別支援学校が整備され、障害の種別によって就学指導がなされていたために遠くまで通わなければならない子どもが、近所の特別支援学校に通うことが可能になり、様々な支援体制が整えられた一方で、結果として「分離教育」が進行することになる。政府は健常児と障害児の交流を課題にあげ、解決策として「交流教育」に取り組んでいる。交流教育がインクルーシブ教育への道であるかのように位置づけられているが、あくまでも交流は、「たまに来るお客さん」であり、インクルーシブの考え方からは遠のいている。特別支援学校の誕生は、障害児の個々の能力を伸ばす特別な支援をするというその裏で、健常児、障害児を分けることで、通常学級の「足でまとい」を排

除しようとする古くからの背景が根付いているのではないだろうか。

4. 日本版インクルーシブ教育 (分けない教育) の構築に向けて ～夢とこだわりの提案～

① コミュニティスクールとのマッチング

——地域を味方につける

2012年9月、文部科学省は、現在障害を持つ子どもの通学先が「原則として特別支援学校」と定められている法令を改正し、普通の小学校に通学しやすくする方針を固めている²⁾。

しかし、障害を持つ子どもが地域の小学校に入学しようとすると、さまざまな困難が立ちはだかるという現実がある。私が通った小学校を例にあげた通り、インクルーシブ教育を実現させる為には、普通学校の保護者や地域住民の理解が絶対的に必要となる。保護者の不安は、「それまで無かったものが増える」という受身の姿勢からくる漠然とした戸惑いや、「学習に遅れをとる」といった具体的な内容まで様々であり、それらを取り除いていかなければならない。

地域住民の理解、心のバリアフリーの最大の力となるものは「関心」である、と私は言い切る。親の関心、教師の関心、社会の関心こそが、良い子どもを育て、良い学校を創り、良い社会を創っていく。私自身が、母の「今日、漢字テストだね」、通学路の八百屋さんの「運動会、見に行くよ」の一言だけで頑張る事ができたからだ。

私の住む静岡県は、前年度の学力テストで小6国語Aが全国最下位となり、その他の教科でも低下傾向が続いていた。「成績が悪かった小・中学校の校長名を公表する」と川勝県知事がメディアを通して発言したことで、波紋を呼んだ。県教育委員会との押し問答の末、平均点以上の学校名の公表に至ったことは記憶に新しい。そして1年後の今年の学力テストでは、すべての教科で大幅な改善が見られ、中3数学Bに至っては全国3位と躍進した³⁾。この結果は、あらかじめ予想がついた事ではないだろうか。「関心」がもたらす児童生徒・教師・保護者の意欲の向上、目標に向けたコミュニケーションの増加、すべてがプラスに働いたのだ。

また、同時期に静岡県は、県内にまだ5校しかないコミュニティスクールの導入促進をしていくと発表した。地域住民や保護者が学校づくりに参画するコミュニティスクールは、2005年の発足当時、全国で17校だったが、2013年4月には1,570校(幼62、小学1,028、中学463、高校9、特別支援8)と増え続け、今後全国の公立小中学校の1割にあたる3,000校を目標にしている⁴⁾。コミュニティスクールの学力向上はすでに実証されており、校長のリーダーシップの下、地域関係者、保護者との連携を深め運営していく構図は、まさにインクルーシブ教育の目指す

ものと一致する。モンスターペアレント、学校に無関心、批判的だった人々を協力者に変え、コミュニティを最大の応援団にしていくことが、インクルーシブ教育実現の鍵となる。現在、全国には特別支援学校のコミュニティスクールも存在するが、私が目指すものはインクルーシブな環境のコミュニティスクールであり、比較的受け入れられやすいコミュニティスクール指定の時期とマッチングさせ、推進していくことを提案したい。

② 人員確保

～手を借り、知恵を借り、そして評価するしくみ～

インクルーシブ教育が90%以上進んでいるイギリスやイタリアの成功例を参考にすれば、1クラス20名程の小人数制(イタリア)であることや、保健省・教育省が連携し、専門性を持つ支援教師を派遣(イギリス)するなどの取り組みがされている。どの国であっても人員の確保が出来なければ、実現しないということである。

現在、通常学級においても発達障害(LD、ADHD、高機能自閉症)への対応が必然なことから、教師の負担は増加する一方であり、教師自身が「進化していく障害に関する教育」を勉強していかなくてはならない。すべての教師が学習するしくみ、教師を目指すすべての学生が大学で必修科目としていくことを前提に、一般教師でも、研修により資格がとれる支援教師制度を作っていくべきである。

また、児童の就学前の体験入学や、障害の程度や本人自身、保護者の希望を取り入れながら学校の選択ができるカウンセラーを学校ごとに配置することや、地域から家庭医を派遣すること、そして個人指導ができるチューター制度を導入することも効果的である。大学生のインターンや高校生以上の学生アルバイト・ボランティアによる参加型支援、孤独防止を狙ったシニア世代の取り込みなど、学校がより開かれたコミュニティの場になることが、人員確保に繋がるだろう。また、これらの積極的参加を社会全体で評価するしくみが重要であると考えている。

③ ユニバーサルデザインの提案型・参加型

「私の街の学校づくり」

今年1月、日本は国連の「障害者の権利条約」を批准した。この条約によって「合理的配慮の不提供」も差別の一種とみなされ、今後益々公共施設で、ユニバーサルデザインが取り入れられることになるだろう。インクルーシブ教育の実現には、学校整備の財政難が度々取りざたされるが、私のイメージするインクルーシブな環境は、地域住民参加型で手作りの温かさがあるものだ。

先日、地域の運動会のポスターが商店街に貼られており、私の小学校の同級生が描いたことが分かったと、彼女の活躍が嬉しかった。私は、絵やデザインといったものにまるでセンスがな

かったためか、友人たちが器用に描く絵やデザインに、いつもわくわくしていた。もっと幅広く学校のユニバーサルデザインを募集し、障害があるものの不便さに寄り添いながら、一緒に工夫し作り上げていく参加型のしくみを作っていきたい。私たち若者が地域に根付き、自分の意見やデザインが広がり、関心を持たずにはいられない程魅力的な「私の街の学校づくり」が出来たら、どんなに素晴らしいだろう。

④ 発信 ～世界へのアプローチ～

日本は、「モラルの国」「おもてなしの国」と言われることはあっても、「福祉の国」「教育の国」として名前があがることはない。日本では、小さい時から「人に迷惑をかけないようにしなさい」と教えられる。しかし、ドイツの友人から、「人に迷惑をかけるのは当たり前、だから人の迷惑も許してあげなさい」と教えられたと聞いた。これが、分離教育とインクルーシブ教育の違いなのではないかと思ひ、私は考えさせられた。教育での福祉の充実を図りたい私のすべきことは、グローバル社会に通用するインクルージョンの考え方やインクルーシブ教育の必要性を発信していくことだ。世界に誇れる新たな「福祉教育の日本」を築くために。

5. 終わりに

誰も排除しない世の中に

先日、ボランティアで出会った特別支援学校の教師を目指している大学院生Nさんがこんな話をした。「彼らは、社会に出ていく時に必要なものを身につけるために毎日頑張っています。彼らは今まで隔離された世界にいたので、社会に出て行った時に友達がいません。皆さんにお願いがあります。友達になってあげてください」と。その後、私はNさんと意見交換がしたいと思ひ、「私はインクルーシブ教育についてこれから勉強していきたいです」と声をかけた。Nさんは「インクルーシブ教育って何?」と答え、私は改めて、日本におけるインクルーシブ教育の認識の低さに愕然とした。私は今まで、特別支援学校の交流会や文化祭の裏方の手伝いに出かけていたので、障害児の母親と話す機会も沢山あった。「障害のない上の兄弟と同じ地域の小学校に行かせてあげたかった」という方もいれば、「きめ細かな指導がある特別支援学校がやっぱり安心だ」という方もいた。それゆえ、決して現在の日本の特別支援学校の取り組みを否定するものではない。しかし、特別支援学校という枠の中でしか生活してこなかった彼らは、社会に出た時にうまく健常者とコミュニケーションをとることができない可能性がある。またそれは、普通学校で障害児と全く接することなく育った健常児も同じことである。私が小学校で、泥団子を作る特別支援学校の彼らの姿を窓越しに見ては「一緒に遊びたい」と思った気

持ちは、決して「友達になってあげる」というようものではなかった。一緒に過ごしていく中でお互いの違いを尊重し、共同作業の中で助け合いながら成長していけば、道徳の授業で習ってきた「弱者には手を差し伸べよう」という教えは、そもそも必要なのではないだろうか。私たちはいつ事故に遭うとも限らないし、いずれは老いてもくる。障害を持った者を社会全体で受け止め、貧困・老い・いじめや虐待、能力主義の世の中で多くの困難を抱えている人がいることに目を向け、誰も排除しない世の中を築いていきたい。

文中注

- 1) 文部科学省 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)のポイント」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301a.htm
- 2) 「障害児、普通学校に通いやすく 従来の政策転換 文科省」『毎日新聞』(毎日新聞社、2012年9日5日付)
- 3) 「学力テスト 小6国語A最下位脱出 本県全科目で改善」『静岡新聞』(静岡新聞社、2014年8月26日付)
- 4) 文部科学省初等中等教育局参事官付「行政説明 コミュニティスクールの今後の展開 ～学校・家庭・地域の三者の協働体制の構築を目指して～」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/02/24/1344503_1.pdf

参考文献

- ・ 茂木俊彦『ノーマライゼーションと障害児教育』全国障害者問題研究会出版部、1994年
- ・ 宮永潔・羽生田博美 編著『マニュアル 障害児の学校選択——やっぱり地域の学校がいい』社会評論社、1995年
- ・ 茂木俊彦『障害児教育を考える』岩波新書、2007年
- ・ 金子郁容『日本で「一番いい」学校——地域連携のイノベーション』岩波書店、2008年

【受賞者インタビュー】

**実際に見てきたこと、
体験から感じてきたことを
伝えたかった**



——コンテストに応募した理由、きっかけは?

自分のこだわりを伝えて、大勢の人に一緒に考えてもらいたいと思ったからです。

——論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか?

書くことだけで言えば短い時間でしたが、体験から感じたことを頭の中でまとめていた期間は長かったです。

——この論文を書く上で苦労したことは?

実際に見てきたこと、体験してきたことを盛り込むには文字制限があり無理なので、重要なことの選別が難しかったです。

——今、どんなことに興味を持っていますか?

日本の教育、日本の福祉の今後です。